

研修講座とSASAの取組み

教科研修課

I 教科研修課における教職員研修講座

教科研修課では、各教科(理科以外)、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間および特別活動、食育、人権教育、NIE、へき地複式教育の多岐にわたる研修講座を開設している。平成24年度は次の3点を方針として企画した研修講座を開設した。

- ①新学習指導要領への対応
- ②学力向上に資する授業力の向上
- ③実践的な研修(実習、演習、実践発表(授業名人等)、授業参観等)

また、特色ある講座として、次の各講座を開設した。

＜授業研究会を取り入れた講座＞

＜新学習指導要領に対応した講座＞

- ・新内容、伝統・文化、校種間の系統性などを踏まえた研修講座
- ・思考力・判断力・表現力の育成、言語活動の充実などを踏まえた研修講座

全体として、昨年度より6講座増の65講座、受講定員78名増の1,225名で開設し、最終的に1,416名の受講者を得た。充足率は横ばいながら、講座満足度は平均3.75(4点満点、H23年度3.10)と向上させることができた。

また、要請研修では、全30件、受講者総数436名であった。内訳は次の通りである。

- 小学校国語科書写・白川文字学で17件256名、小学校図画工作科で9件103名、小・中・高の家庭科で2件25名、小学校音楽科で1件12名、NIEで1件40名



要請研修 図画工作科

II SASA 2012 (第60次福井県学力調査) 報告書説明会の開催

1 報告書の現状

報告書は、第47次より、それまでの観点別・内容別平均正答率と考察のまとめに加え、各教科観点別に課題分析と指導の方向性について記述した。当初は数行ずつだった分析と指導の方向性の記述も、その後更に指導の手立てや指導の具体例を加えたものにしてきた。

現在では、図1のように、各教科の各観点で課題が見られた調査問題それぞれに対して、その調査問題、正答、誤答分析、指導の手立て、指導例と1問につき全2ページ程度を記述し、本県の児童生徒の学習上の課題を明らかにし、授業改善を通して学力向上を目指す報告書となっている。

2 報告書説明会開催のねらい

このように充実してきた報告書だが、学校現場で十分に活用されてきたかという点必ずしもそうとは言えない現状があった。各学校に送付されているものの、中にはその存在すら知らない先生方も多い。実際に本文にじっくり目を通して、指導例を参考に自らの授業改善に活かしていただくという目的が達成されていなかった。

そこで、昨年度は、報告書の存在を各学校の先生方にまずは知ってもらうことを念頭に、調査対象の学年の先生方の参加を得て、報告書の説明会を夏季休業中に実施した。

今年度は、知ってもらうことから本来の目的である授業改善に

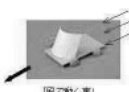
自然現象についての知識・理解	前年度正答率	本年度正答率
問題(4) 身の回りの事物から自然の風を利用して動く物を指導することが出来る。	B (66%)	80.2%
3 (4) 窓だちのともみきんは、ぶふの方以外に、風の方でも車を動かせると考え、次のような車をつくりました。この車のように、自然の風を利用して動くものを一つ書きましょう。ただし、「風で動く車」以外のものを書きましょう。		
正答 ヨット、はね船、風車、風見どり、たて、こいのぼり、風りん、風力発電、風向計、パラグライダー、ゴラゴライダーなど (自然の風を利用して動くものであれば正答)		
・誤答の44.4%の中には、乾電池や光電池を利用した物など、風の方を利用して動く物に着目できていない誤答が見られました。 これを改善するためには、自然の風を利用して動く物を生活の中からも指導することができそうです。		
・生活との関連を認識し、授業で学んだものがどのように応用されているかを取り上げ学習を行う必要があります。 ・「風」「ぶふ」「光」「電石」「電球」のそれぞれの性質や働きを利用して動く物についてまとめることが大切です。		
指導例1 自然の風をエネルギーとしてイメージさせる学習		
(1) 3年の理科書 第44頁「風やゴムで動かそう」の導入の始めに、学習の導入として、「風の方」という言葉を十分にイメージさせるために「風を利用したもの」を挙げて共通点は何かを考えさせる活動を行います。また、目に見えない物をエネルギーとして捉えることは難しいので、自然の風で簡単に動かせるような車を考えることも風を認識させるために効果的です。		
ぶふ: こいのぼり……など ぶふ: 輪ゴムか、風船がゴムで動く。動かしやすさで……など 空(光電池): ソーラーカー、電球、太陽電池……など(他、発電機と似たもの)…… 空(光電池以外): ソーラーカー、太陽熱温水器、育苗平し、温室……など 電球: 電球の明かり、ソーラーカー、風車、ゲーム、電風扇、リモコン、携帯電話……など 電石: マグネージウム、水素の下、空気で燃焼、方位磁針、電石(電石)のふた、ランドセルの留め具……など		
※ 自然の風や空気中の塵埃を……など、授業で学んだものについて説明することも大切です。		

図1 指導例

活かしていただくことをねらって、各学校で授業改善を通しての学力向上に中心的に関わっている先生方の参加を得て、8月20日（月）仁愛大学を会場に、次のような内容で開催した。



全体会の様子

3 今年度の報告書説明会

- (1) 全体会：SASAのねらいや結果の全体説明、分析ツールの利用法についての説明
- (2) 分科会：小中別会場に、それぞれ小学校4教科、中学校5教科全ての教科について、その出題の意図、結果の報告、指導例の説明
- (3) グループ協議：希望教科毎のグループになり、学力向上に向けた各校の取組状況や、教科における具体的な授業実践状況についての協議

実施当日の参加者からのアンケート結果は表1～3のようであった。

表1

	①	②	③	④
全体会について	14.2%	66.8%	15.4%	0.8%
分科会について	16.6%	65.2%	15.4%	2.0%
グループ協議について	30.0%	54.5%	9.5%	0.8%

(①満足②どちらかという満足③どちらかという不満④不満)

表2

	①	②	③	④
「指導例」について	19.4%	60.1%	18.6%	0.8%

(①活用しやすい②どちらかという活用しやすい

③どちらかという活用しにくい④活用しにくい)

表3

	①	②	③	④
会場について	27.7%	62.8%	3.6%	5.5%

(①1会場が良い②嶺南嶺北の2会場③1会場2会場を隔年で④その他)

(1) 全体会について

参加者全体の81.0%から、「満足」・「どちらかという満足」の回答を得た。

理由は、「分析ツールを利用してのデータ分析の方法、利点がわかりやすかった」、「もっと早い時期にあれば有効に活用できると思う」などである。

(2) 分科会について

参加者全体の81.8%から、「満足」・「どちらかという満足」の回答を得た。

理由は、「県全体の課題がわかり、自校との比較ができた」、「報告書をじっくり見る機会がなかったので、これを機会に活用したい」、「分析等内容が濃くなってきており、職場に広めていかななくてはと思う」などである。

中学校の先生方には、校内の学力向上に中心的に関わっている立場の先生方に参加いただいていることから、専門教科以外も含め5教科全ての教科の説明を聞いていただいたが、38.8%からの不満傾向の回答を得た。

理由は、「他教科の内容も聞くことができ、学校全体のことを考える上で役に立った」との意見もあったが、「5教科の説明は、やはり教科担当が聞いた方が解りやすいし有効だ」などの意見も多かった。

(3) グループ協議について

参加者全体の84.5%から、「満足」・「どちらかという満足」の回答を得た。

理由は、「嶺北・嶺南の地区を越えて協議できたことは有り難かった」、「各校の実情や工夫がうかがえ、取り入れていきたいものが多くあった」などである。

(4) 報告書の指導事例について

指導例について、「活用しやすい」・「どちらかという活用しやすい」との回答が79.5%であった。

理由は、「どの学年でどのように指導したらよいかははっきり書かれているので活用しやすい」、「押さえるべき内容、ポイント、資料等が一目でわかるようにまとめられている」、「単に授業の流れを示すのではなく、授業改善の方向性、どんなことを狙って言語活動を設定したかを示している」などである。

(5) 報告書について

「小中で分けて欲しい」、「(中学校では)プリントアウトすれば済むのだが教科毎の分冊が有り難い」などの意見もいただいた。

今後、上記を受けて内容の検討をするとともに、次章Ⅲでの記述のように調査実施を早めたことにより、報告書説明会も夏休みより前の開催が可能であるから、早い段階から授業改善に活用していただくことも検討していきたい。

Ⅲ SASA2012・12(第61次福井県学力調査)の実施

1 実施時期の変更

県学力調査は、昭和26年から始まり今年度第61次の実施となっている。現在の調査目的は、本県の児童・生徒の学習状況および学習と生活に関する意識や実態を把握するとともに、その結果を分析し学習指導上の課題を明らかにし、授業改善を目指し学力の向上に資することである。実施時期は、第21次よりほとんどが年度始の4月や5月中に実施してきたが、平成19年4月26日に全国学力・学習状況調査が実施されることを受けて、その年から2月初旬に時期を早めて実施してきた。

しかし、この2月実施は、結果の概要や全県および各校のデータを内容とする結果速報の発送が年度末になり、児童・生徒へのフィードバックのための時間が十分に確保できなかった。そこで、今年度のSASA2012・12では、次の2点をねらいとして、実施時期を12月中～下旬に変更した。

- ① 学年末までに、課題克服教材集(リトライプリント)と併せて、児童・生徒の課題を見据えた指導を行う。
- ② 自校の課題を分析し、新年度に向けての学力向上プランやスクールプラン等に反映させる。

2 更なる「活用力問題」の充実、発展

近年課題となっている活用力問題への対応としては、以下の点が挙げられる。

- (1) 理科は、第60次より3年ごとに全国学力調査に取り入れられると予想し、
 - ・活用力問題を4～5割程度(児童・生徒の解答時間換算)取り入れ、問題を作成した。
 - ・3月には東京書籍の活用力問題作成担当者を訪ね、「活用力問題」やその問題作りについて理解を深めた。
 - ・活用力問題作成にあたり、中学理科は第60次より所内教科担当者の増員を図った。
- (2) 社会、中学校英語も「応用的・発展的事項」の中に活用力問題を取り入れた。(各教科小問1～2問程度)
- (3) 国語、算数/数学は、第58次より「基礎力問題」「活用力問題」と分けて問題作りを進めている。第59次からは、活用力問題作成に関するアドバイザーを委嘱し、講演会と問題検討会も実施した。

アドバイザー(第60次～) 国語：山形大学大学院 教育実践研究科 准教授 三浦登志一 氏
算数/数学：静岡大学 教育学部数学教育講座 准教授 松元新一郎 氏

3 新学習指導要領への対応

小学校は昨年度から、中学校は今年度から新学習指導要領が実施されることにともない、

- (1) 中学校は、数学・理科においてはすでに移行措置として新学習指導要領の内容が指導されていることを踏まえ、その範囲も出題した。
- (2) 小・中学校とも、新学習指導要領で新しく加えられた内容を盛り込むとともに、思考力・判断力・表現力を育むため自分の意見や考えを表現する問題を設定した。

4 問題作成のポイント

また、次の点にも考慮し問題を作成した。

- ・SASA2012およびH24度全国学力・学習状況調査の課題に対応。
- ・全教科で活用力問題を設定。(全般的に問題の中で状況設定を行う)